

小さな窓から

新藤兼人



小さな窓から

朝日新聞社

小さな窓から

定価 一二〇〇円

一九八五年九月五日第一刷発行
一九八五年十月三十日第四刷発行

著者 新藤兼人

発行者 川口信行

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五十三-12
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

小さな窓から
目次

夫婦とは

男と女

台所革命

母の思い出

加害者はだれか

姉の地平線

アメリカ製日本人

ぜんそく考

ある結婚

父の肖像

酔いどれ妻

ライバル

雪が舞う

三匹の猫たち

ふり向いた女の目

ある少女の出発

荷風忌

9

12

15

18

21

24

27

30

33

36

39

42

45

48

51

54

57

墓のある場所	114
溝口忌	110
俺はあとでいいよ	106
八月十五日	103
原爆を落とした男	100
朝顔	96
ああ離婚	93
紫陽花のひと	90
生き証人	87
子どもたちよ	83
青春の町	80
砂漠の中の森の町	77
三文役者	74
足跡	70
家	66
兄の生涯	63
恩師	60

あるカメラマンの一生

N君の仕事

竜安寺門前町

雨の日の朝

裏切りの心

無声映画の詩

栗ごはん

私は脱がない

遠足

風の中の三味線

あなたに従います

めしを食ったか

同窓会

現代風俗

結婚しない女

友ありて

蔵の中

168 165 162 159 156 152 149 146 143 139 135 132 129 126 123 120 117

正月餅

D氏の碑

ふるさとの声

幕切れは

縄文の足跡

人間の姿

女ひとり

あによめ

役者根性

おもちゃ

水ぬるむ

ひいばあさん

はんでん

あとがき

216 213 210 207 204 201 197 194 190 187 183 179 175 171

装画 装幀
むとう 敏
多田 進

小さな窓から

夫婦とは

去年の暮れ、十一月下旬のある日、尾道からフェリーに乗って因島へ向かった。重井港まで三十分である。

松本さんの手紙には、重井港からタクシーで十五分ぐらいとあった。閑散とした栈橋の広場にタクシーがあったが、運転する人がいない。運転手は栈橋で釣り糸をたれていた。

鏡浦へ行きたい、というと、鏡浦のどこへかいのう、と懐かしい土地なまり。松本という人ですが。鏡浦の半分は松本じゃがのう。広島から帰っちゃった人です。ああ、わかつとります、近ごろ普請しちゃった人ですのう。

車は、海べりの道をくねくねとはうようにして行く。対向車は皆無。白いなぎさがどこまでもつづき、ひっそりとした浜辺に人影も見えない。

坂道をのぼって切り通しをぬけると、眼下に一にぎりの集落が見えた。ほとんどの家がかわらぶきである。それに日がかがやいてひっそりとした静寂。花崗岩土壌の白い道が集落の中央を貫いていたが、人の姿はまったくなかった。

車が一軒の家の前に止まった。小さな新築の家である。車を降りて庭に立つと、物音で縁側

に人の姿が現れた。小腰をかめた老人である。松本さんだった。

私たちは四人きょうだいだった。いちばん上の兄は十二ちがい、これはもう二十年もまえに死亡している。次が八つちがい、アメリカ移民に嫁いでカリフォルニアに行ったが、おとし彼の地で亡くなった。次の姉は四つちがい、広島で産婆をしていたが、三年まえに他界した。七十一だった。松本さんはこの姉の夫である。

大正の中ごろ、私の家が倒産して、家屋敷まで売り払うことになり、一家は離散して、それぞれの道を自分できめて歩むことになったのである。母は倒産騒ぎの中で死亡し、父は尾道警察にはいった兄に引きとられた。

次姉は広島で看護婦になって、のちに尾道の病院へ移った。広島から尾道に移るについては、複雑な男関係が絡んでいて、兄が強引に尾道に連れて帰ったということだった。

尾道の病院で姉は松本さんに出会った。それは戦争の末期で、松本さんが召集されるとき、無事に戦争をくぐりぬけることができた、一緒になりましょうと約束して別れ、松本さんは無事復員した。姉は三十すぎて遅い結婚をした。

幸いの少なかった姉に、松本さんとの結婚はしあわせであった。姉たちは広島へ行った。松本さんの知人が広島に製材所をひらき、松本さんはそこで働くことになったからである。産婆の免許を持っていた姉は借家の軒下に看板をつるした。

姉たちの住居は太田川のほとりで、原爆長屋と呼ばれたスラム街の対岸だった。そこには病院で子供を産めない貧しい人が多かった。その人たちは姉の手をかりてお産をし、姉はそこへ

通いつづけた。お礼は鶏一羽とか卵十個とかいうものもあった。

姉には持病のぜんそくがあった。年とともに病状はすすんだ。発作が起けると三日四日は半病人である。松本さんは朝昼晩の食事はおろか、夜もつきつきりで姉の背中をさすって看病した。それは私の目には、『春琴抄』（谷崎潤一郎の代表作）の春琴とこれに仕える丁稚佐助よりもこまやかな情に映った。

姉は、故郷の山にとり残された新藤家の墓を気にし、生きているうちに先祖の墓を広島に移したいと切望した。私は姉の意に添ってこれを実行したのだが、広島の親せきの寺に移された新藤家を代表する墓を見て安心し、わたしが死んだらこの中に入れてくれ、といった。松本さんはそれをほほ笑んで聞いていられたが、姉は松本の姓になっているのだから松本の墓にはいるべきなのに、お母さんやお父さんのいる墓にはいりたいといった。

姉が死ぬと松本さんは、製材所をやめられた。なんにもする気がなくなったそうだ。姉の骨を半分持って生まれ故郷の鏡浦へ帰られた。妹夫婦のわずかな土地に一人だけ住める家を建てられた。私は一年のちにやっと訪ねたのである。

松本さんは急に老けられた。姉が生きていたときの、目のかがやきは、はれぼったくなくなった。ような顔の奥にしずんでしまった。

男と女

私は、二十七年ぶりに、乙羽信子と結婚した。乙羽君とは「愛妻物語」を撮って以来のつきあいで、世間からは不倫の関係といわれてきた。

「愛妻物語」は、昭和十八年に死んだ亡き妻に鎮魂の思いをこめて、戦後作ったもので、主演をした乙羽君が亡妻に性格も格好もよく似ていた。そのとき私には再婚の妻がいた。子どもも二人いた。

妻と離別して、乙羽君と結婚することが出来なかった。家庭をこわすのも怖かったが、私たちの愛が本物であるかどうか自分の心に問うてみなければならなかった。乙羽君もまた結婚を望まなかった。同じためらいがあったかもしれない。周囲は私たちの関係を一時的なものと思っていた。

宝塚から大映に転じた乙羽君は「愛妻物語」がきっかけとなって、私たちの独立プロに参加して働くようになり、私は乙羽君とコンビを組んで仕事をしつづけた。

不倫の関係といわれるような女優と仕事をしないで、他のひととすればいいようなものだが、仕事というものは自分の生き方と切り離しては考えられないもので、気持ちの通じ合うひとと

はとことんやってみたいのである。これは私の性格だ。

そして、乙羽君の義父が死亡し、彼女は天涯孤独となった。私のほうは二人の子が大学を終える年ごろになり、妻と離別することになった。家庭の複雑な事情があったが、妻が家を出たと言いだしたのは、私に責任があった。

このとき、子どもたちや周囲のものは、私たちが結婚するのではないかと思ったが、私たちはしなかった。死ぬまで結婚はすまいと私は思いをかためていた。それがせめてもの去った妻への答えだときめていた。

ところが五年後妻が死亡し、私の考えは変わった。年齢からいうと、乙羽君より私のほうが先に死ぬはずだから、そのとき中ぶらりんのままの関係を残すのは、長年の乙羽君の心づくしにむくいないことになる。

そんなわけで、子どもたちの賛同のもと、とうとう結婚となった。この間二十七年の歳月がすぎ、私は六十の半ばに達していた。結婚は区役所へ行って届けねばすむ。私は届け用紙を受けつけてもらって、なんだ、こんなに簡単なことなのかと、いささか拍子抜けの感じがした。

さて、結婚するとなると、家庭をどうするかだ。女優をやめて女房稼業に専念しようかと乙羽君が言った。私は反対したのである。乙羽君は一生の仕事として女優をやってきたのだから、女優を志どおりつづけるべきだと思った。乙羽君が台所をすれば多少便利かも知れないが、仕事場をはなれた女優を見るのはつらい。

それでは、家庭をやりながら女優をやったらかどうか。それは都合のいい方法だが、何かをや

りながらの女優では、女優道に申しわけがたつまい。片手間に女優などやられては第一、私が不愉快だ。結論は、女優を本業としながら、ヒマがあったら台所女房をつとめる、ということにして落ちついた。

そうすれば、台所に没頭しているときも、女優が台所に没頭しているのであって、それは女優稼業のこやしになるはずだから、悪くはあるまい。

乙羽君が、どんな仕事をしているのか、ほとんど私は知らない。芝居、テレビ、映画とやっているが、こんなことをこれからやりたいという相談を受けたこともないし、夜遅くまで台本とにらめっこをしているとき、そばを通して台本の表紙を瞥見し、ははあ、こういうものをやっているのかとうなずく。

私はたいがいシナリオを書いているから、ほとんど口を利かない。しゃべりながらシナリオは書けないのだ。乙羽君も私が何を書いているのか知らない。

女優というショウバイもかなり重労働で、げっそりしているのを見ることがある。その疲労がまた仕事の面白みだと思うから、いたわりの声をかけたりはしない。仕事は苦痛なほど、本人にとってはやりがいがあり、のめりこめるのである。

息子には二人の子どもがいる。乙羽君はこの孫に、おばあちゃん、と呼ばれてはじめは面食らっていたが、いまではどうやらなれ、孫と電話でながい話をしたりしている。